比恵遺跡群(19)

——— 比恵遺跡群第55次発掘調査報告 ———

福岡市埋蔵文化財調査報告書第442集

福岡市教育委員会
No.
埋蔵文化財センター

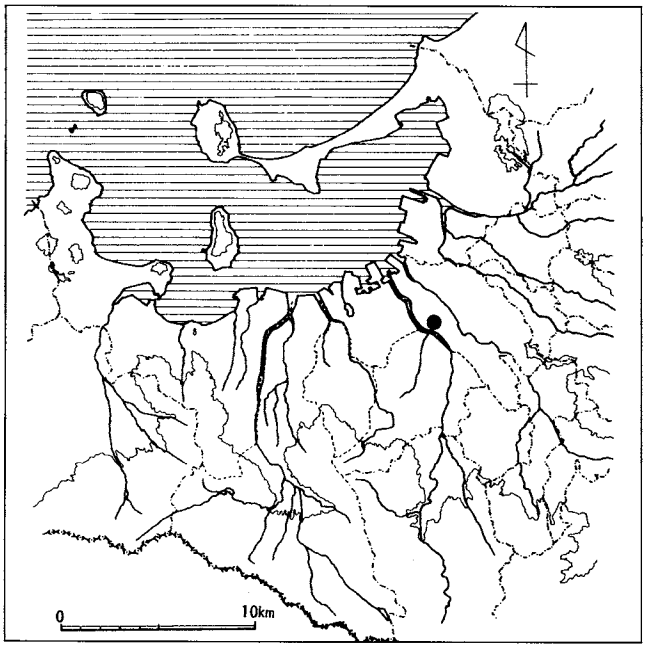
1996

福岡市教育委員会

比 恵 遺 跡 群 (19)

——— 比恵遺跡群第55次発掘調査報告 ———

福岡市埋蔵文化財調査報告書第442集



遺跡略号　ＨＩＥ－55

遺跡調査番号９４６１

１９９６

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には多くの文化財が残されています。本市では文化財の保護、活用に努めていますが、各種の開発によってやむを得ず失われる埋蔵文化財については、記録保存のための発掘調査を行っています。

今回調査を行った比恵遺跡第５５次調査は、共同住宅建設に先立って行われたもので弥生時代から古墳時代にわたる遺構、遺物が見つかりました。

本書が文化財の認識と理解、更には学術研究に役立てば幸いに思います。

最後になりましたが、発掘調査から整理、報告にいたるまでご理解とご協力をいただいた地権者の日下部新蔵様を始めとする多くの皆様に深く感謝する次第です。

平成８年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾花　剛

例　言

1．本書は共同住宅建設に先だって、福岡市教育委員会が1995年２月13日～３月22日にかけて行なった比恵遺跡群第55次調査の報告書である。
2．検出した遺構については、調査時には遺構を示す記号Ｍを付して検出順に通し番号を付した。本書では、この番号からＭを除き、遺構の性格を示す用語を付して、溝１、土壙２のように記述する。
3．本書で使用する方位は磁北である。
4．本書で使用した遺構実測図は宮井善朗、東哲志、樋口公美子、平田こずえ、今泉博子、吹春憲治が作成し、藤川繁昌が補佐した。製図は宮井、林由紀子が行った。
5．本書で使用した遺物の実測図は宮井の他平田こずえ、今泉博子、西村智道、北村幸子が作成した。また製図は宮井の他林由紀子が行った。
6．挿図中の遺物実測図に付した括弧内の番号は埋蔵文化財センター収蔵時の登録番号である。
7．本書使用の写真は宮井が撮影したものである。
8．本調査に関わる記録、遺物類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので、活用されたい。
9．本書の執筆、編集は宮井が行なった。

本 文 目 次

Ⅰ．　はじめに
（1）調査に至る経緯 …… 1
（2）調査体制 …… 1
Ⅱ．　比恵遺跡群の概要 …… 3
Ⅲ．　調査の記録
（1）概要 …… 5
（2）弥生時代の遺構と遺物 …… 5
（3）古墳時代の遺構と遺物 …… 13
（4）出土石器 …… 17
（5）小結 …… 17

挿 図 目 次

Ｆｉｇ．1　比恵遺跡周辺の遺跡（1：25000） …… 2
Ｆｉｇ．2　今回調査地点と周辺の既調査地点（1：4000） …… 4
Ｆｉｇ．3　調査区位置図（1：500） …… 6
Ｆｉｇ．4　溝1実測図（1：60） …… 7
Ｆｉｇ．5　溝1出土土器実測図（1：8、1：4） …… 7
Ｆｉｇ．6　住居跡4実測図（1：80） …… 8
Ｆｉｇ．7　住居跡4、土壙7、土壙21出土土器（1：4） …… 8
Ｆｉｇ．8　遺構8、ピット250実測図（1：20）　出土土器実測図（1：4、1：8）
井戸18実測図（1：30） …… 9
Ｆｉｇ．9　土壙9、土壙10実測図（1：60)、出土土器実測図（1：4） …… 10
Ｆｉｇ．10　井戸18出土土器実測図1（1：4） …… 10
Ｆｉｇ．11　井戸18出土土器実測図2（1：4） …… 11
Ｆｉｇ．12　井戸2、井戸3実測図（1：40） …… 12
Ｆｉｇ．13　井戸2出土土器実測図（1：3） …… 13
Ｆｉｇ．14　井戸3出土土器実測図（1：3） …… 14
Ｆｉｇ．15　溝17、19実測図（1：60）　出土土器実測図（1：3） …… 15
Ｆｉｇ．16　出土石器実測図（1：2） …… 16
Ｆｉｇ．17　遺構配置図（1：100） …… 18

図 版 目 次

ＰＬ．１　（１）調査区全景（西から）
（２）溝１（東から）
ＰＬ．２　（１）住居跡４（西から）
（２）遺構８（北から）
ＰＬ．３　（１）井戸18(西から）
（２）井戸18床面
ＰＬ．４　（１）井戸２（東から）
（２）井戸３（西から）
ＰＬ．５　（１）溝19遺物出土状況(西から）
（２）ピット250（南から）
ＰＬ．６　出土遺物

Ⅰ．はじめに

(1)　調査に至る経緯

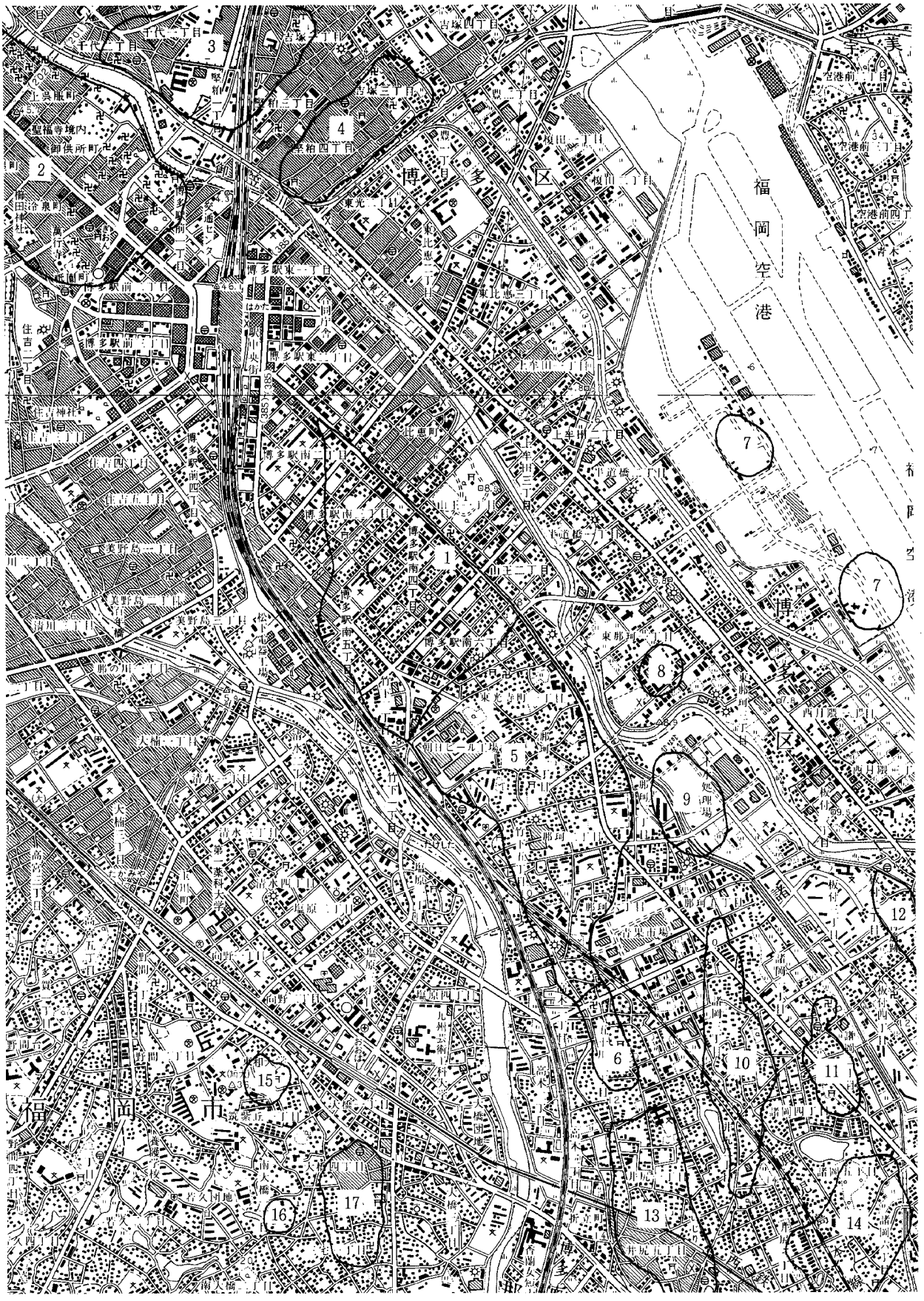
1994年７月４日付けで、日下部新蔵氏より、共同住宅建設予定地内における埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが出された。申請地は比恵遺跡群内に位置しており、埋蔵文化財課では審査願いを受けて８月31日に試掘調査を行なった。その結果申請地内にはピット、竪穴式住居などの遺構と弥生土器などの遺物が出土した。この成果をもとに協議を行ない、工事によってやむを得ず破壊される部分については発掘調査を行ない、記録保存を図ることとなった。発掘調査は、日下部氏との委託契約により、福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行なうこととなり、1994年２月13日に着手し、３月22日に終了した。

(2)　調査体制

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　　尾花　剛
調査総括　埋蔵文化財課　課長　折尾学（調査年度）　荒巻輝勝（整理年度）第２係長　山崎純男（調査年度）　山口譲治（整理年度）
調査庶務　埋蔵文化財課第１係　西田結香
調査担当　埋蔵文化財課第２係　宮井善朗
調査補助　東哲志（福岡大学）　樋口公美子（九州大学）　平田こずえ　今泉博子（別府大学）
調査作業　野村道夫　太田正顕　田原房五郎　楠林司朗　吉田米男　吹春憲治　藤川繁昌　江下和彦　森田祐子　古賀典子　持丸玲子　吉田恭子　森園弘子　平田浩美　谷口美由紀　水町志保
整理補助　西村智道　平田こずえ　今泉博子　北村幸子
整理作業　大石加代子　林由紀子　太田順子

また調査時には福岡市教育委員会の山崎純男氏、山口譲治氏をはじめとする先輩、同僚諸氏からも多くの助言をいただいた。深く感謝すると共に、本報告書に十分活かしきれなかったことをお詫びしたい。

遺跡調査番号	９４６１		遺跡略号	ＨＩＥ―55	
調査地地番	福岡市博多区博多駅南６丁目16―2				
開発面積	734㎡	調査対象面積	390㎡	調査面積	384㎡
調査期間	1994年２月13日～３月22日		分布地図番号	37-0127	



1. 比恵遺跡　2. 博多遺跡　3. 堅粕遺跡　4. 吉塚遺跡　5. 那珂遺跡　6. 五十川遺跡　7. 雀居遺跡　8. 東那珂遺跡　9. 那珂君休遺跡
10. 諸岡A遺跡　11. 諸岡B遺跡　12. 板付遺跡　13. 井尻B遺跡　14. 笹原遺跡　15. 野間B遺跡　16. 三宅廃寺　17. 大橋遺跡

Fig. 1　比恵遺跡周辺の遺跡（1 ：25000）

Ⅱ．比恵遺跡群の概要

比恵遺跡群は福岡平野のほぼ中央に位置する。福岡平野には御笠川、那珂川の二つの河川が南から北へ貫流している。この両河川は比恵遺跡及びその南側に位置する那珂遺跡付近で最も接近し、それからほぼ平行して博多湾に注ぐ。両河川の間には南から春日丘陵、板付台地、那珂、比恵の台地などの丘陵、台地群が伸びている。丘陵、台地内にはまた小規模な谷が多く入り込み、複雑な地形を呈している。この丘陵、台地の上や沖積地内の微高地などには、とくに弥生時代以降を中心として各時代にわたって多くの遺跡が発見されている。比恵遺跡群はその内の一つで、春日丘陵から北へ派生して来る台地の最北端に立地する。比恵遺跡群は北側は台地の先端と共に沖積地に没する。この沖積地は博多湾岸に発達する砂丘の後背湿地である。その砂丘上には弥生時代に始まり、古代、中世に最盛期を迎える博多遺跡群がある。南側は浅い谷を隔てて那珂遺跡群と接する。

比恵遺跡群の調査は早く、1938年の鏡山猛によるものを嚆矢とする。戦後には1950年代の森貞次郎の調査などがあるが、1980年代以降、開発の増加と、文化財にかかわる組織の整備とが相俟って調査が急増する。1995年11月現在で、調査次数は57次を数える。

比恵遺跡群における遺構遺物の確認は旧石器時代に遡る。量的には少ないが、ナイフ形石器が出土している。縄文時代の遺物、遺構は極めて僅少である。縄文時代晩期末～弥生時代前期にいたって遺構、遺物とも急増する。該期の遺物は台地北側、西側の縁辺部に多く分布する。３次調査地点では突帯文土器がまとまって出土している。また台地北側の調査地点では、竪穴式住居、貯蔵穴、木器貯蔵穴などの遺構も多く検出されており、このうち木器貯蔵穴からは、木製の農具、工具、容器等の他、土器調整用の工具（ハケメ原体）、剣形木製品、儀杖等も出土している。弥生時代中期には遺跡全域に拡大する。遺跡のほぼ中央部には甕棺墓地が造営され、細形銅剣を副葬する甕棺墓もある。この甕棺墓を中心とする一角は、墳丘墓の可能性も指摘されている。また集落の中の住居の中には、今回調査地点の北側の50次調査地点で直径12ｍを測るような大型の円形住居も検出されている。中期から後期にかけては竪穴式住居のほか溝、井戸、掘立柱建物等が各所で検出されている。また後期の溝の中には集落を囲む環溝と考えられるものや、方計区画をなすものが検出されている。とくに井戸からは多量の土器、木器が出土することが多い。木器の中には椰子の実製の容器、朱彩を施したさしば（?）等注目される遺物もある。青銅器の鋳型も武器形祭器を主として多く見つかっているが、生活遺構から破片で出土している例がほとんどである。しかし博多駅南４丁目における第40次、42次調査では、鋳型と共に取瓶が出土し、比恵遺跡群内でも青銅器製作が行われていた可能性が極めて高いことが判明している。

古墳時代にはいっても引き続き集落が営まれるが、比恵遺跡群内では前方後円墳をはじめ古墳は確認されていない。今回調査地点に北接する31次調査地点では古墳時代前期初頭の方形周溝墓が検出されている。古墳時代中期の生活遺構は少ないが、後期にはいると再び住居跡などが増加する。古墳時代後期では、博多駅南４丁目の８次調査、31次調査、７次、13次調査、50次調査で、大形の掘立柱建物群が見つかっている。建物群には柵列や、溝が伴っている。同様の遺構は南側の那珂遺跡でも見つかっている。時期的には初現が６世紀後半頃、終末が７世紀代に収まるものと見られている。整然とした配列は官衙を思わせるものがあり、日本書紀宣化元年（536）条に見える「那津官家」との関連が考えられている。

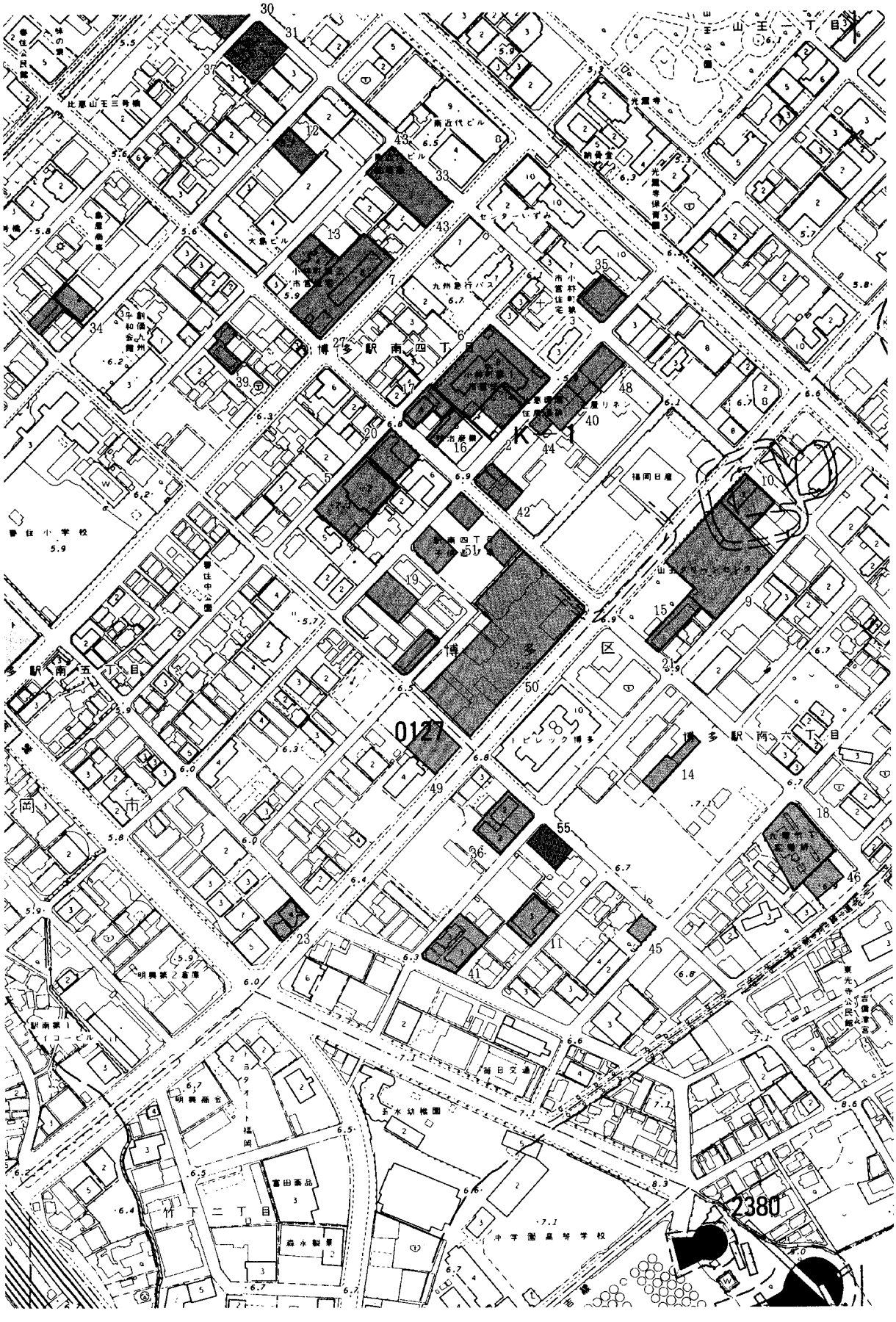


Fig. 2　今回調査地点と周辺の既調査地点　（1：4000）

Ⅲ. 調査の記録

（1）概　要

比恵遺跡群第55次調査では弥生時代中期から後期、古墳時代後期の遺構遺物が検出された。弥生時代の遺構としては中期の円形住居跡1基、後期の井戸1基、後期の甕棺墓？1基、溝1条、土壙、ピットなどがある。また古墳時代の遺構としては、井戸2基、溝3条、土壙、ピットなどがあり、いずれも後期のものである。

（2）弥生時代の遺構と遺物

溝1（Fig.4）　調査区の北西隅で検出した北向きから緩やかに西向きに湾曲する溝である。土層の観察及び、底面の状況から2～3基の遺構の切り合いと思われる。溝1－1は幅30cmほどの細い溝と思われる。溝1－2と1－3は土層観察でしか区別できず、それぞれの正確な形状は不明である。同一遺構の堆積状況の差かもしれない。

出土遺物(Fig.5)　1～5は弥生土器である。1は大形甕である。口縁部は若干内傾する鋤先状を呈する。端部は内外とも丸く収める。口縁部下に断面三角の突帯を一条巡らせる。胴部はやや張りを持つようである。外面に黒色顔料と思われる痕跡が見られる。磨滅は著しいが、内外面ともナデ調整されているようである。2は甕である。「く」の字に近い口縁部を持つ。復元口径27cmを測る。口縁端部は丸く収める。3は壷口縁部である。鋤先状を呈する。復元口径24cmを測る。磨滅が著しいが丹塗の痕跡が見られる。4は甕の口縁部片である。「く」の字を呈し内湾する口縁部を持つ。口縁部下に断面三角の突帯を巡らせる。5は壷の底部であろう。平底で外面にはハケメを施す。内底部に指頭痕が見られる。底径9cmを測る。

住居跡4（Fig.6）　円形を呈する住居跡である。遺存は極めて悪い。また南端部付近を同様な遺存の悪い遺構と切り合うのか輪郭が不明瞭である。住居の径は8.5m程に復元できよう。4本柱になるものと考えられる。中央部付近で検出した**土壙7**は住居跡4に伴う中央土壙であろう。弥生土器が出土している。径1mほどの円形で、住居跡床面からの深さ70cmほどである。また住居跡を切る溝19の床面で検出した**土壙21**は、弥生土器が出土しており、住居跡4に関連した遺構の可能性が高い。

出土遺物(Fig.7)　遺構自体の遺存が極めて悪いため住居跡4の図化可能な遺物は1点のみである。1は弥生土器の甕口縁部である。口縁部は鋤先状を呈し、上面はほぼ平坦である。内側には張り出さない。外端部は丸く収める。2は住居跡4の中央土壙と考えられる土壙7から出土した弥生土器底部である。壷と考えられる。内面には指頭痕がみられる。底径7cmを測る。3は土壙21出土の弥生土器の甕である。口縁部は鋤先状を呈し、外側に大きく張り出す。上面はほぼ水平である。胴部はほとんど張らない。外面にはハケメが見られる。復元口径22.4cmを測る。これらの土器から、住居跡はほぼ弥生時代中期中頃に属すると考えられる。

遺構8（Fig.8）　東西に長い浅い土壙の東端に大形の甕を据えた遺構である。土壙、土器とも遺存は悪い。従って中央部で検出したピットが、伴うものかどうか不明である。長1.5m、幅0.8mを測る。

出土遺物　Fig.8－1が出土土器である。大形甕である。肩部と胴部下位に各一条の突帯を巡らす器形のものであろう。突帯は比較的高く、刻目を施す。外面にはハケメを施す。弥生時代後期後半頃の所産であろう。

土壙9、土壙10(Fig.9)　調査区北東隅で検出した。蹄型を呈し向い合う2基の土壙である。いずれも内側の壁が直に近くまた部分的にオーバーハングする箇所も見られる。当初境界部にある地山ロームを再堆積土として円形の土壙1基になる可能性を考慮しつつ掘り下げたが、地山ロームは本来のも

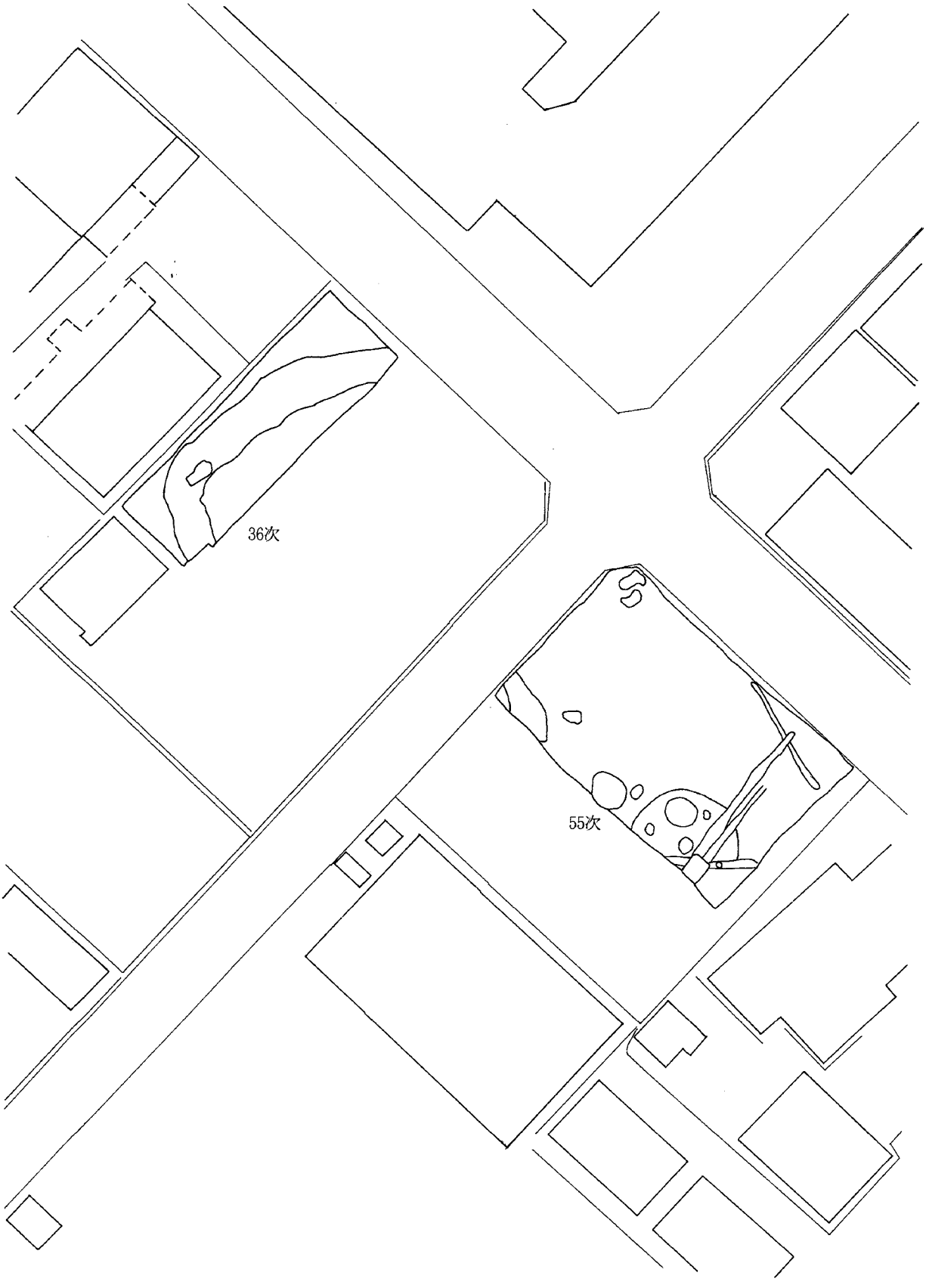


Fig. 3　調査区位置図　（1：500）

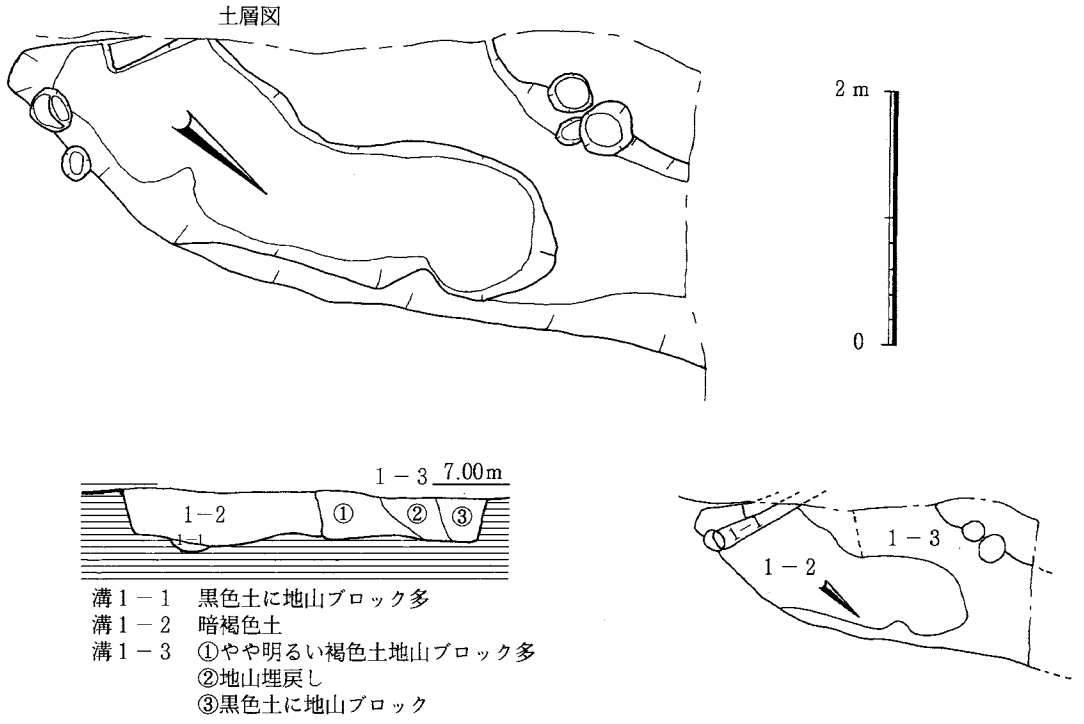


Fig. 4　溝1実測図（1：60）

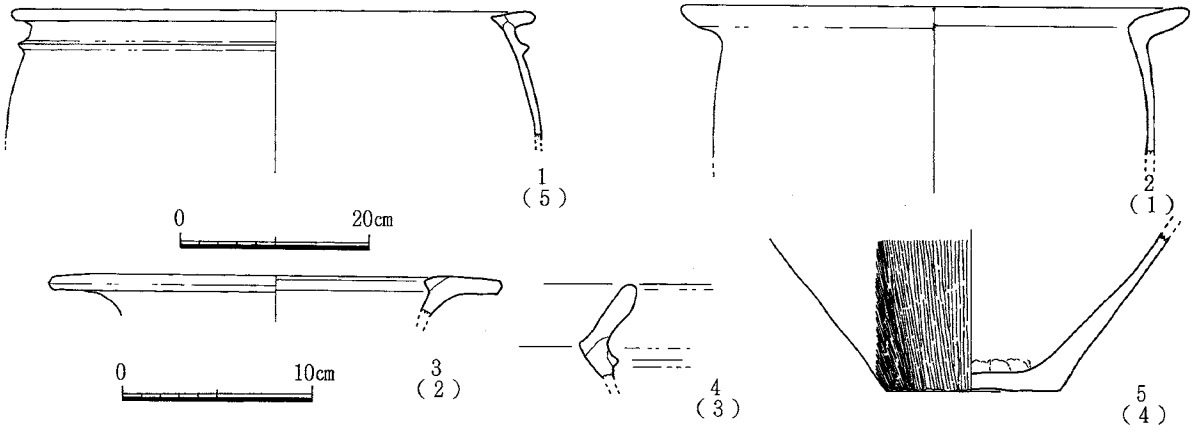


Fig. 5　溝1出土土器実測図（1：4、1：8）

のであり、結果的には2基の土壙であることが確認された。円形土壙を意図したものの掘り下げを中断した状態であるのかもしれない。

出土遺物　1は土壙9出土の弥生土器の甕である。口縁部は「く」の字形を呈する。外面はハケメが見られる。復元口径25cmを測る。2は土壙10出土の弥生土器の甕口縁部である。口縁部は鋤先状を呈する。上面はほぼ平坦であるが、外端部付近で下方に垂下する。口縁下に強いヨコナデにより浅い沈線が巡る。外面にはハケメが見られる。復元口径27cmを測る。

井戸18(Fig. 8)　不定楕円形を呈する井戸である。壁はほぼ直立している。古墳時代の井戸2、井戸3と比べるとかなり小形である。検出面での径1mほどを測り、深さは2mを測る。検出面付近で遺物の集積が見られ、底部付近には器壁の一部を打ち欠いた土器が完存で投棄されていた。

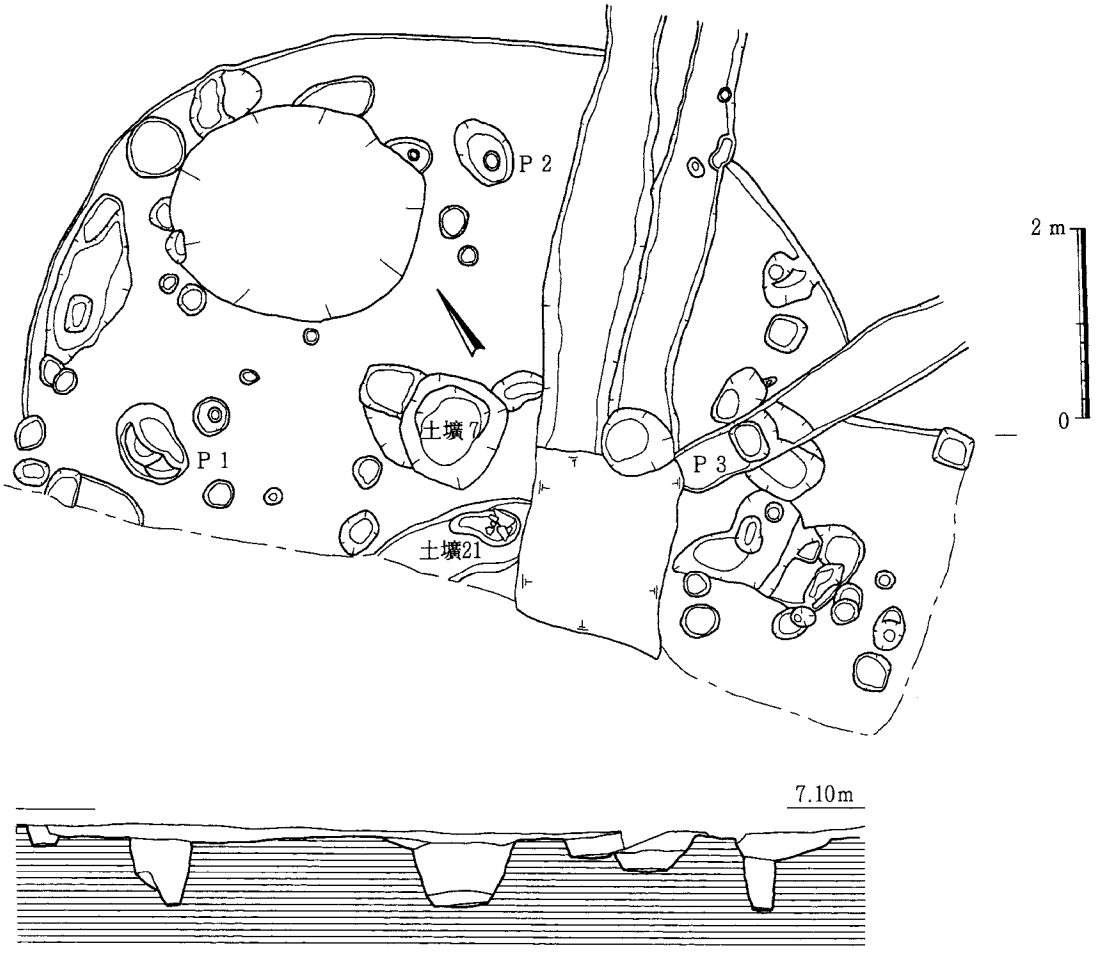


Fig. 6　住居跡４実測図（１：80）

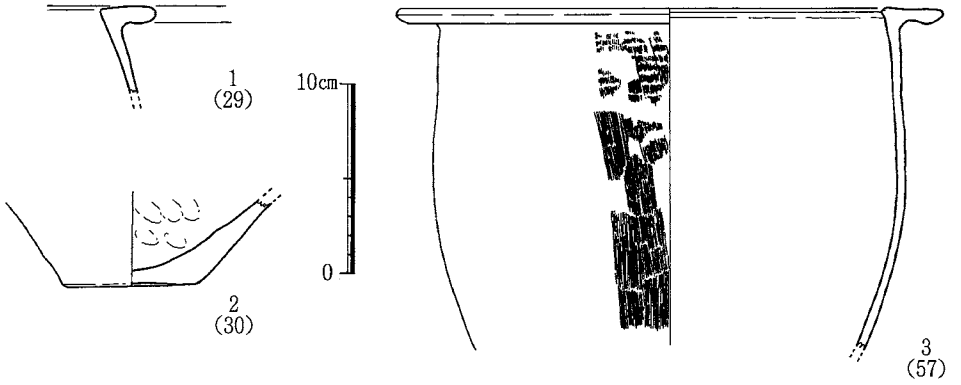
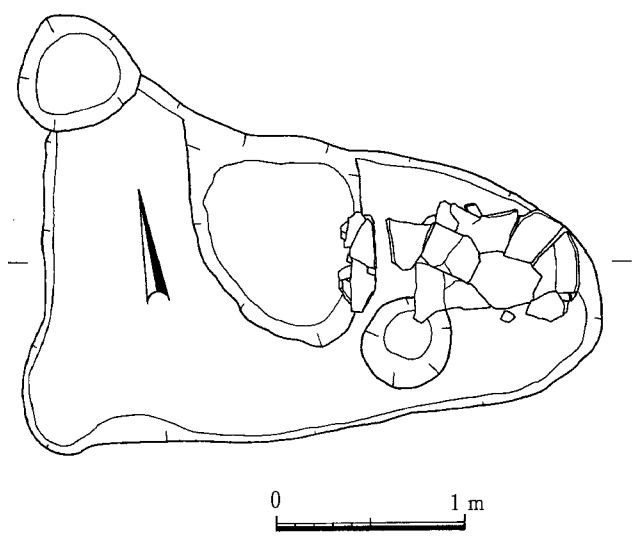
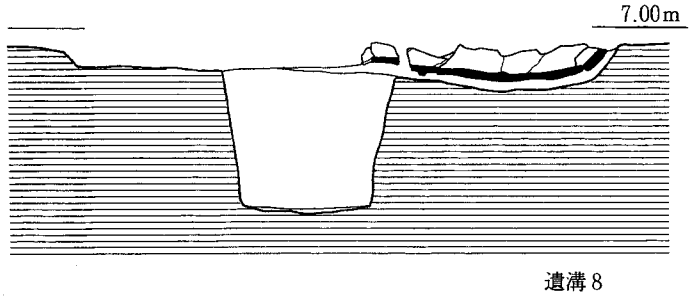


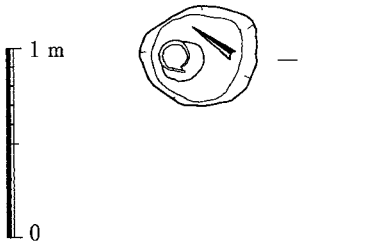
Fig. 7　住居跡４、土壙７、土壙21出土土器（１：４）

出土遺物(Fig.10,11)　検出面近くのレベルで集中していた遺物群を上層、その下位を中層、底面近くで集中していた遺物群を下層として取り上げた。１～８は上層出土の土器である。１は弥生土器の鉢である。甕の胴部から半截した器形を呈する。底部は平底である。外面はハケメが見られる。打ち欠きは故意に為されたものと考えられる。口径14.3cm、底径6cm、器高13.7cmを測る。２は甕である。口縁部は「く」の字形を呈する。復元口径24cmを測る。３は甕の口縁部である。「く」の字形を呈する。外面に目の粗いハケメが見られる。４～７は底部である。４は甕であろう。平底である。底径8.6cmを測る。５は壷であろう。胴部はやや丸みを帯びるようである。外面にもナデを施す。底径6.6cmを測る。７も甕である。内外面ともナデ。復元底径７cmを測る。８も甕であろう。平底で、底径6cmを測る。43は大形の甕もしくは壷の底部である。底部は平底であるが、胴部との境は不明瞭である。底径8.4cmを測る。

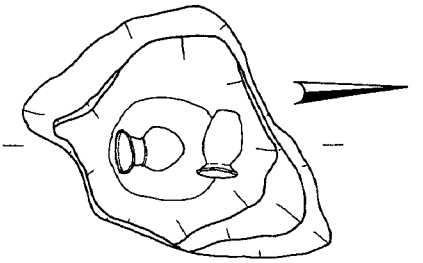


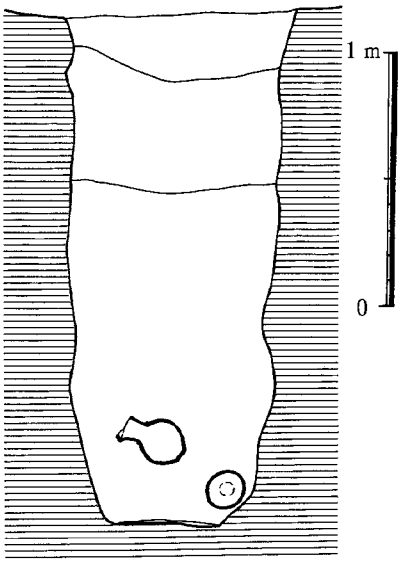


遺構8

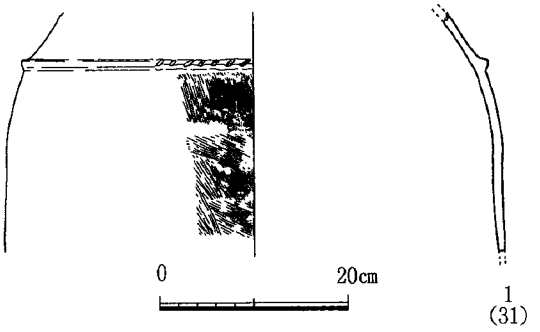


ピット250





井戸18



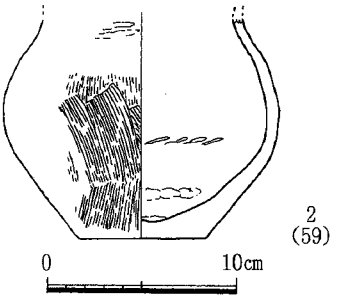


Fig. 8　遺構8、ピット２５０実測図（１：20）　出土土器実測図（１：４、１：８）
井戸１８実測図（１：30）

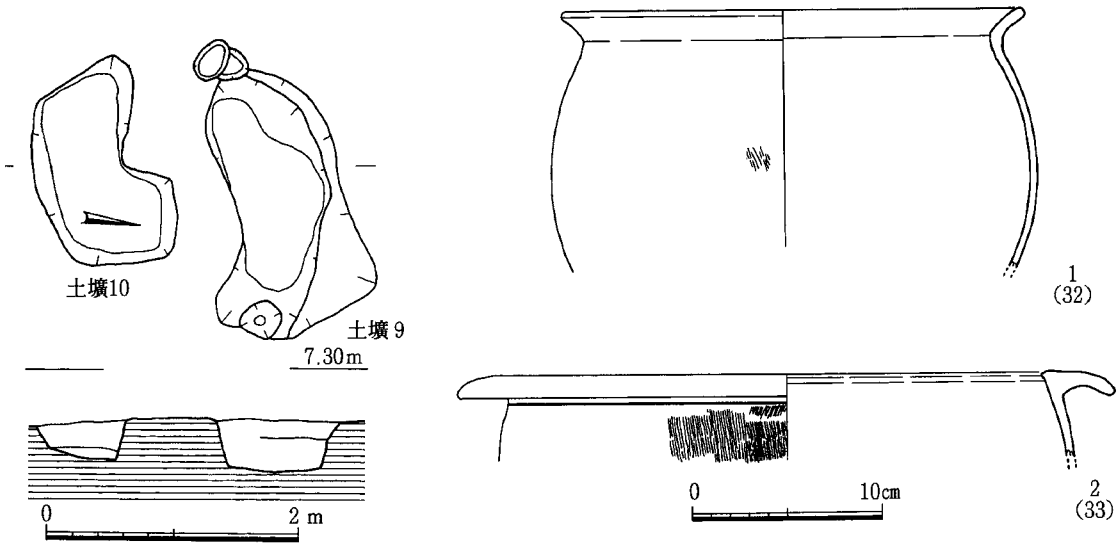


Fig. 9　土壙９、土壙１０実測図（１：60)、　　出土遺物実測図（１：４）

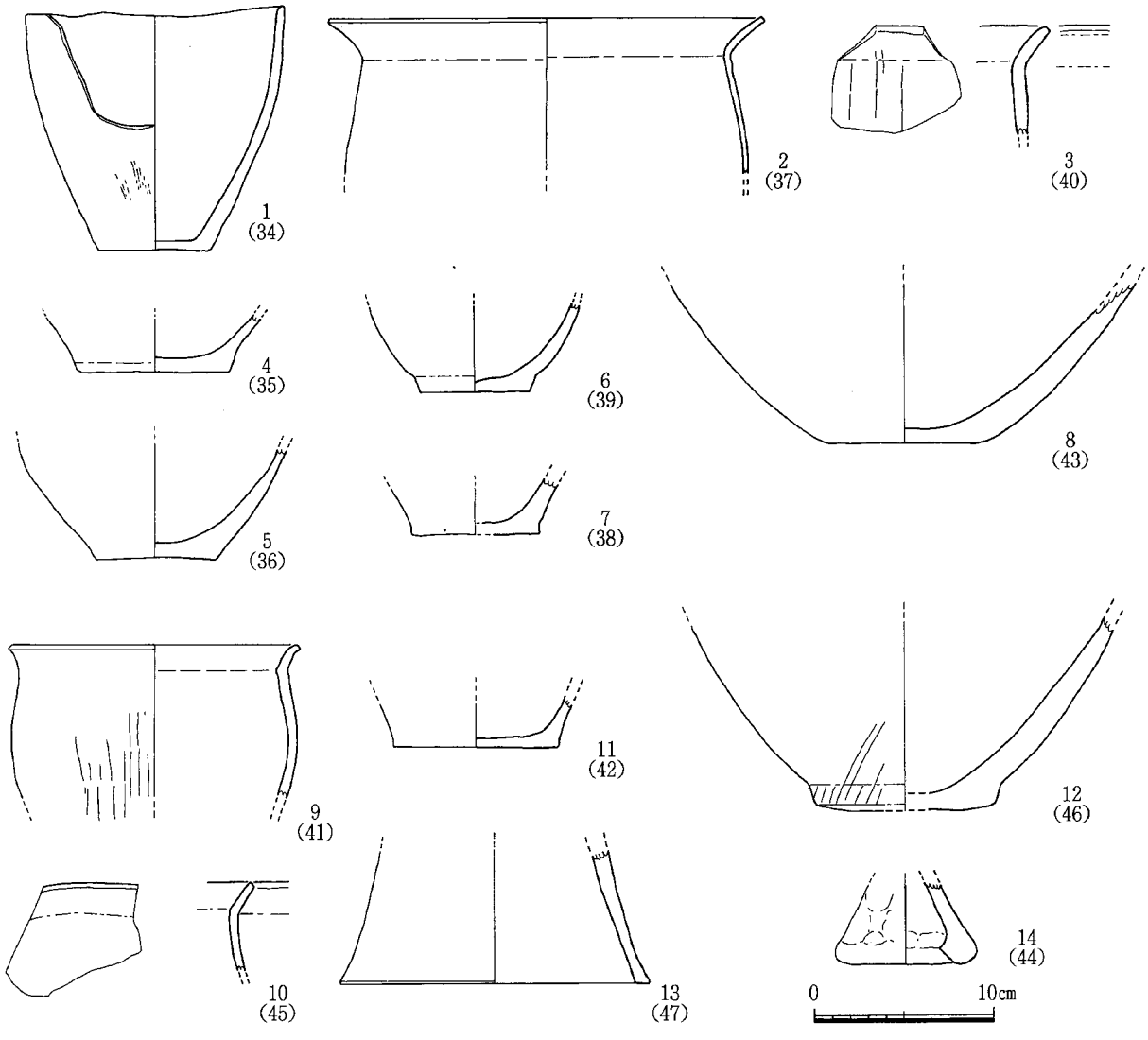


Fig. 10　井戸18出土土器実測図 (1)（１：４）

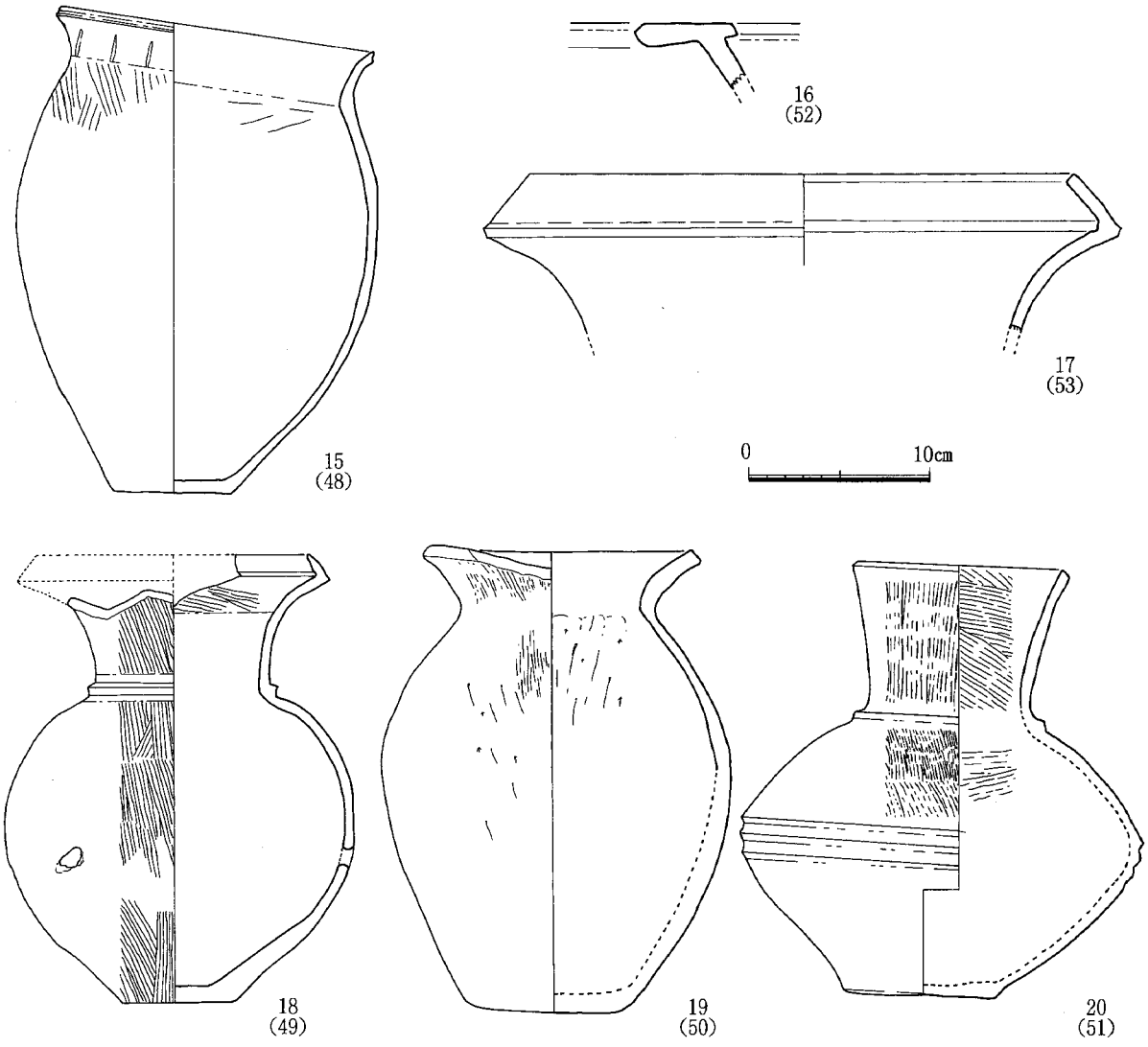
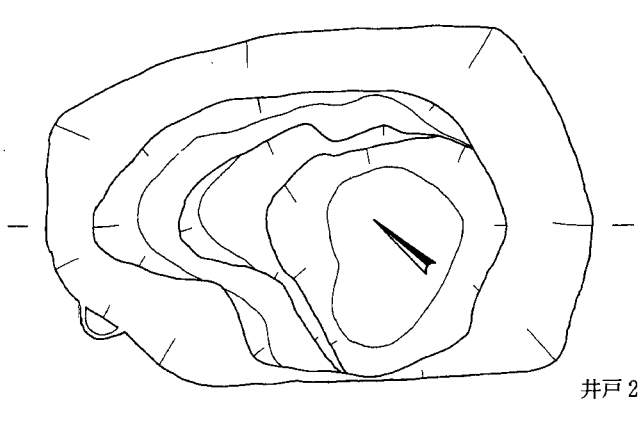


Fig. 11　井戸18出土土器実測図 (2)（1 : 4）

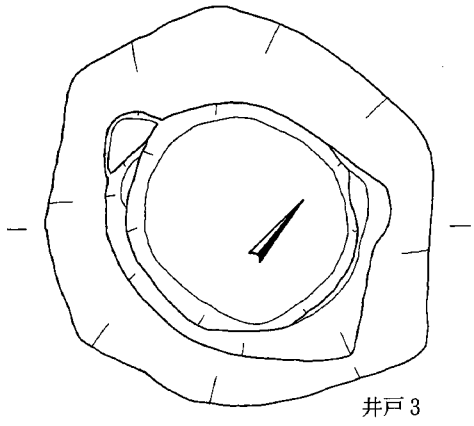
Fig.10－9～Fig.11－15は中層出土の土器である。9は小形の甕である。口縁部は「く」の字形を呈する。外面には目の粗いハケメが見られる。復元口径15.6cmを測る。10も同様な甕の口縁部片である。11は甕底部である。平底で復元底径9cmを測る。12も底部である。大形甕であろうか。外面には目の粗いハケメが見られる。器壁は厚い。復元底径10cmを測る。13は支脚の脚端部である。器壁は厚い。内外面ユビオサエ調整される。14は器台脚と思われるが、やや器壁が薄いのが疑問である。端部は坦面をなす。脚端径17cmを測る。Fig.11－15は甕である。口縁部は「く」の字形を呈し、外反する。端部は坦面をなす。胴部は卵形で、平底である。内外面には目の粗いハケメが見られる。口縁部外面に浅い刻目様の痕跡が見られる。なんらかの原体痕であろうか。口縁部を大きく欠くのは故意の打ち欠きと考えられる。口径17.3cm、底径6.4cm、器高22cmを測る。

Fig.11－16～20は下層出土の土器である。18は複合口縁壷である。井戸の底面で出土した。口縁部に故意の打ち欠きがあるが完存品である。口縁部は直線的に内傾する。頸部は大きく広がる。頸部付け根に断面三角の突帯を一条巡らせる。胴部はほぼ球形である。底部は平底である。外面にはハケメを施し、また丹塗を施す。口縁部を打ち欠き、胴部にも焼成後に穿孔を施す。復元口径14.8cm、器高24.8cm、底径6cmを測る。19は49と同様底面で出土した甕である。口縁部は大きく開く。端部は坦面



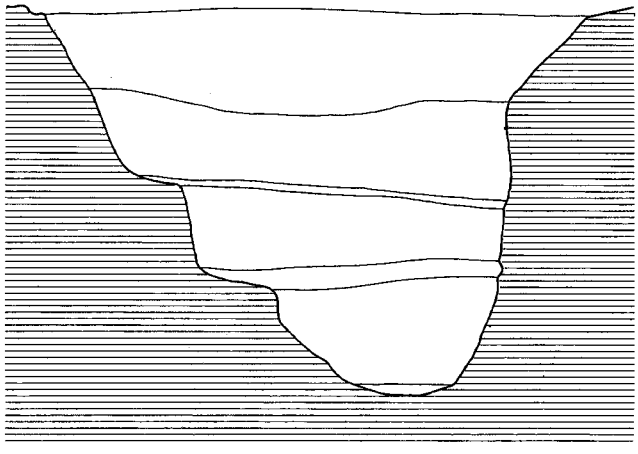
井戸 2

7.500m

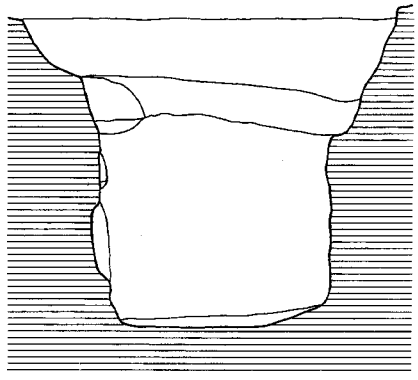


井戸 3

7.500m



0 1 m



7.500m

① 褐色シルト
② 暗褐色シルト
③ 黒褐色シルト
赤褐色地山ロームブロックを
多く混じえる

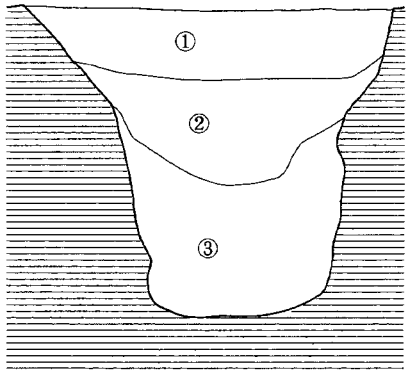


Fig. 12　井戸 2、井戸 3 実測図（1 : 40）

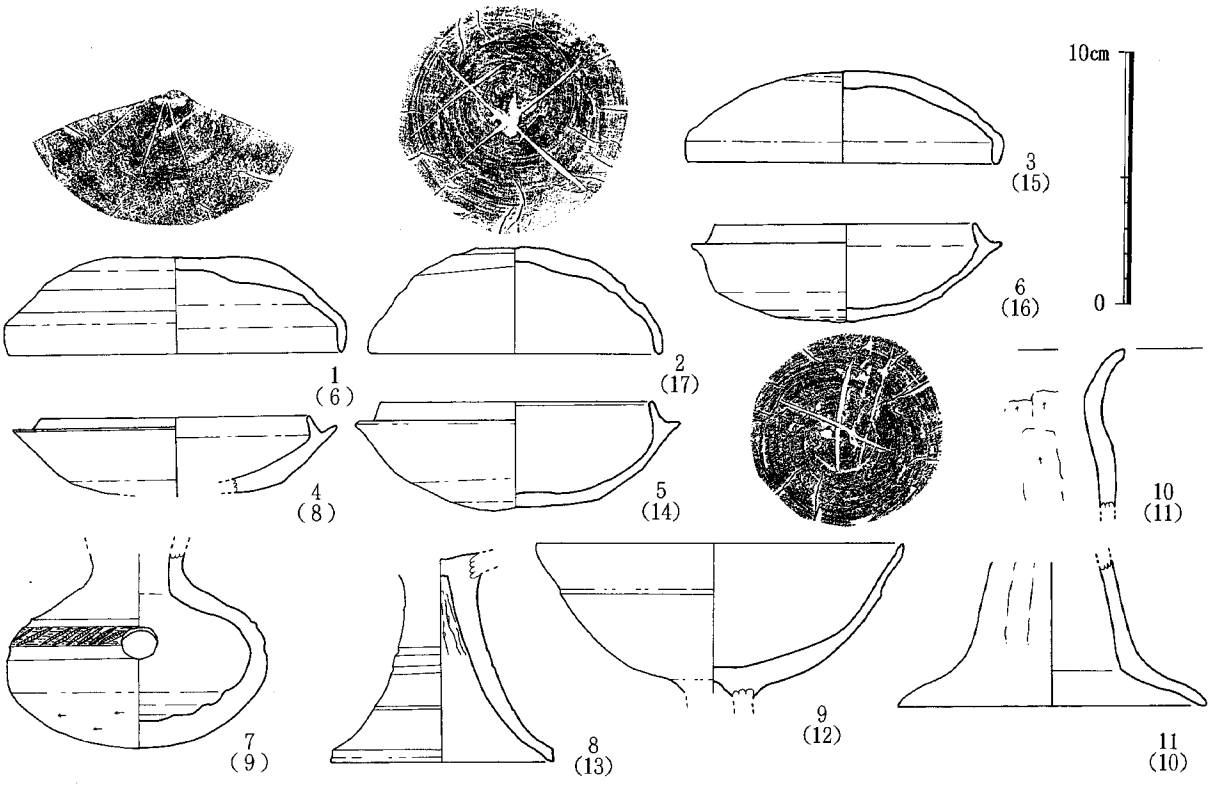


Fig.13　井戸２出土土器実測図（１：３）

をなす。胴部は長胴で、不安定な平底をなす。外面はハケメの後ケズリを施し、内面にもケズリを施す。口縁部の一部を故意に打ち欠く。口径14cm、器高25.5cm、底径８cmを測る。調整及び器形に在地的ではない特徴が見られ、外来系の土器ではないかと思われる。20は直口壷である。頸部は緩やかに広がり、口縁端部は坦面をなす。頸部付け根に一条、胴部中位に三条、低い断面三角の突帯を巡らす。胴部は算盤玉形を呈する。底部は平底である。胴部外面はハケメを施し、突帯から下位をミガキに近い丁寧なナデを施す。頸部内面にもハケメが見られる。口径11cm、器高24cm、底径8.5cm、胴部最大径22cmを測る。16は大形甕の口縁部である。鋤先状を呈し、内側に大きく張り出す。17は複合口縁壷の口縁部である。屈曲部の上はわずかに内湾しつつ内傾する。端部は坦面をなし、屈曲部にも坦面を持つ。復元口径30cmを測る。外面にはハケメを施すようである。

ピット250(Fig.８)　形状、規模においては他のピットと特に異なるところはないが、底面に口縁を打ち欠いた壷が置かれていた。地鎮的な意図を持つものであろうか。

出土遺物(Fig.８－２)　２は小形の壷である。短い直立する口縁が付くものであろう。胴部は球形で、底部は安定感のある平底である。頸部付け根付近にタタキ状の痕跡が見られる。また胴部内面にも原体状の痕跡が規則的な配列で見られる。底径７cmを測る。

（３）古墳時代の遺構と遺物

井戸２(Fig.12)　楕円形を呈する井戸である。検出面で長径2.9m、短径２m、深さ２mを測る。北側の壁が階段状を呈しており、掘削時の昇降の便を図ったものと考えられる。底面は八女粘土層に達しているが、調査時には涌水は見られなかった。出土遺物から古墳時代後期に属する井戸と判断できる。

出土遺物(Fig.13)　１は坏蓋である。口縁端部で短く屈曲する。天井部に回転ヘラケズリを施す。口径13cm、器高3.8cmを測る。２も坏蓋である。天井部の高い器形を呈する。天井部１／３ほどに回転

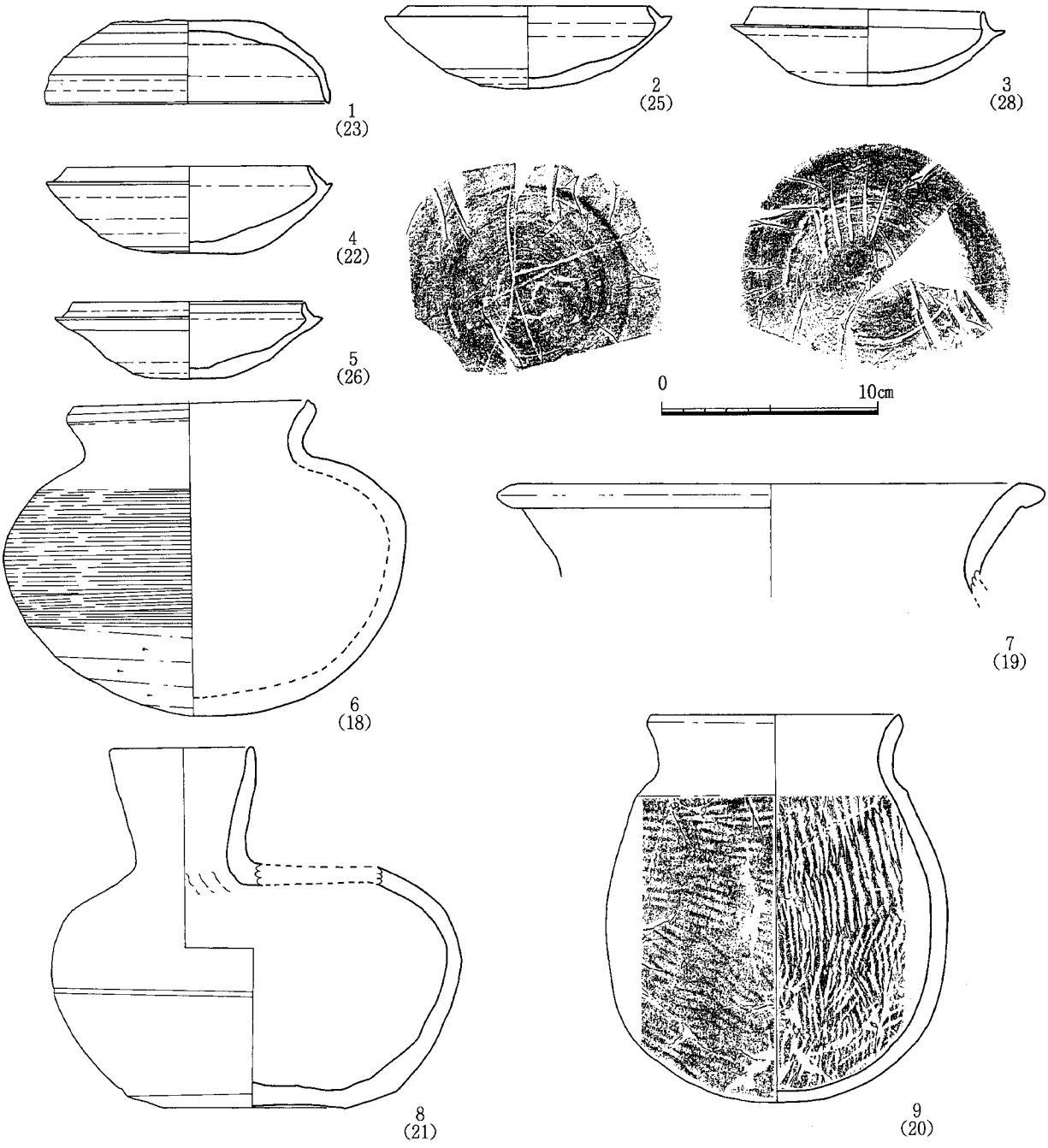


Fig. 14　井戸３出土土器実測図（１：３）

ヘラケズリを施す。復元口径11.7cm、器高4.1cmを測る。３は須恵器の坏蓋である。口縁端部近くで短く屈曲する。天井部１／３ほどに回転ヘラケズリを施す。天井部内面には静止ナデを施す。口径12.5　、器高3.6cmを測る。４は坏身である。底部は平たく、回転ヘラケズリを施す。口縁部は短く、わずかに内傾する。復元口径10.4cmを測る。５は坏身である。底部は丸みを持ち、２／３ほどに回転ヘラケズリを施す。口径10.6cm、受部径12.8cm、器高5.1cmを測る。内底部に不定方向のナデを施す。６も坏身である。底部は丸みを持ち、１／２ほどに回転ヘラケズリを施す。口径10.2cm、受部径12.2cm、器高3.9cmを測る。７は須恵器甕の胴部である。胴部中位に穿孔を施し、孔の上下に沈線を巡らせる。沈線間にはカキメを巡らし、櫛状工具で斜めに刻目を施す。底部には回転ヘラケズリを施す。

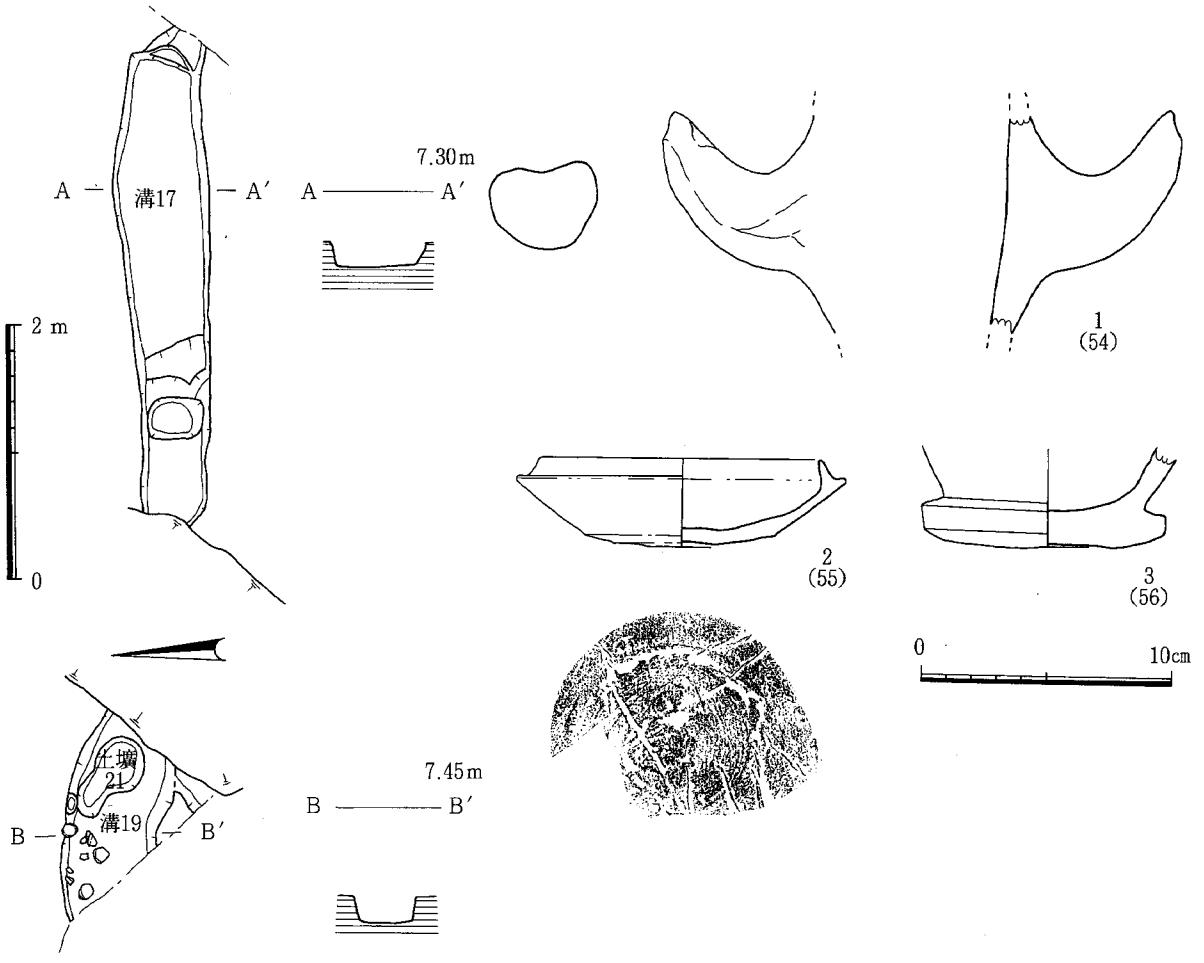


Fig.15　溝17、19実測図（１：60）　　出土土器実測図（１：３）

胴部最大径10.2cm、胴部高6.5cmを測る。８は須恵器高坏の脚部である。中位に二条、下位に一条の沈線を巡らせる。脚端部内側はわずかに内湾させる。脚端径8.8cm、脚高７cmを測る。９は土師器の高坏坏部である。口縁部は端部付近に段を持つ。端部はわずかに内湾する。比較的深い坏部である。口縁部から坏部外面にかけてはヨコナデ、内面はナデ、接合部はナデ調整されている。口径19.5cm、坏部高5.5cmを測る。11は土師器高坏の脚部である。脚柱部は比較的太い。脚端部は大きく広がりつつ、わずかに内湾する。脚柱部は外面ヘラ状工具による縦方向のナデ、脚端部は内外面ヨコナデを施す。脚端径12cmを測る。10は土師器甕の口縁部である。端部は短く外反する。胴部内面にはケズリを施す。

井戸３（Fig.12）　弥生時代住居跡４を切る。ほぼ円形の井戸跡である。検出面で径２m、深さ1.6mを測る。壁はほぼ直立し、円筒状を呈する。東側の壁に浅い横穴の抉り込みが螺旋状に施される。昇降時の足場と考えられる。

出土遺物(Fig.13)　１は須恵器坏蓋である。天井部は比較的平たい。天井部内面に静止ナデを施す。２は坏身である。口縁部は短く内傾する。底部１／３ほどに回転ヘラケズリを施す。内底部には不定方向のナデを施す。復元口径11cm、受部径13cm、器高3.8cmを測る。３は坏身である。口縁部は外反しながら立ち上がる。底部１／３ほどに回転ヘラケズリを施す。底部は比較的平たい。復元口径10.6cm、かえり径12.6cm、器高3.5cmを測る。４も坏身である。口縁部は内傾する。受け部との境には沈線状の段がつく。底部１／３ほどにヘラケズリを施す。口径11cm、器高４cmを測る。完形品である。

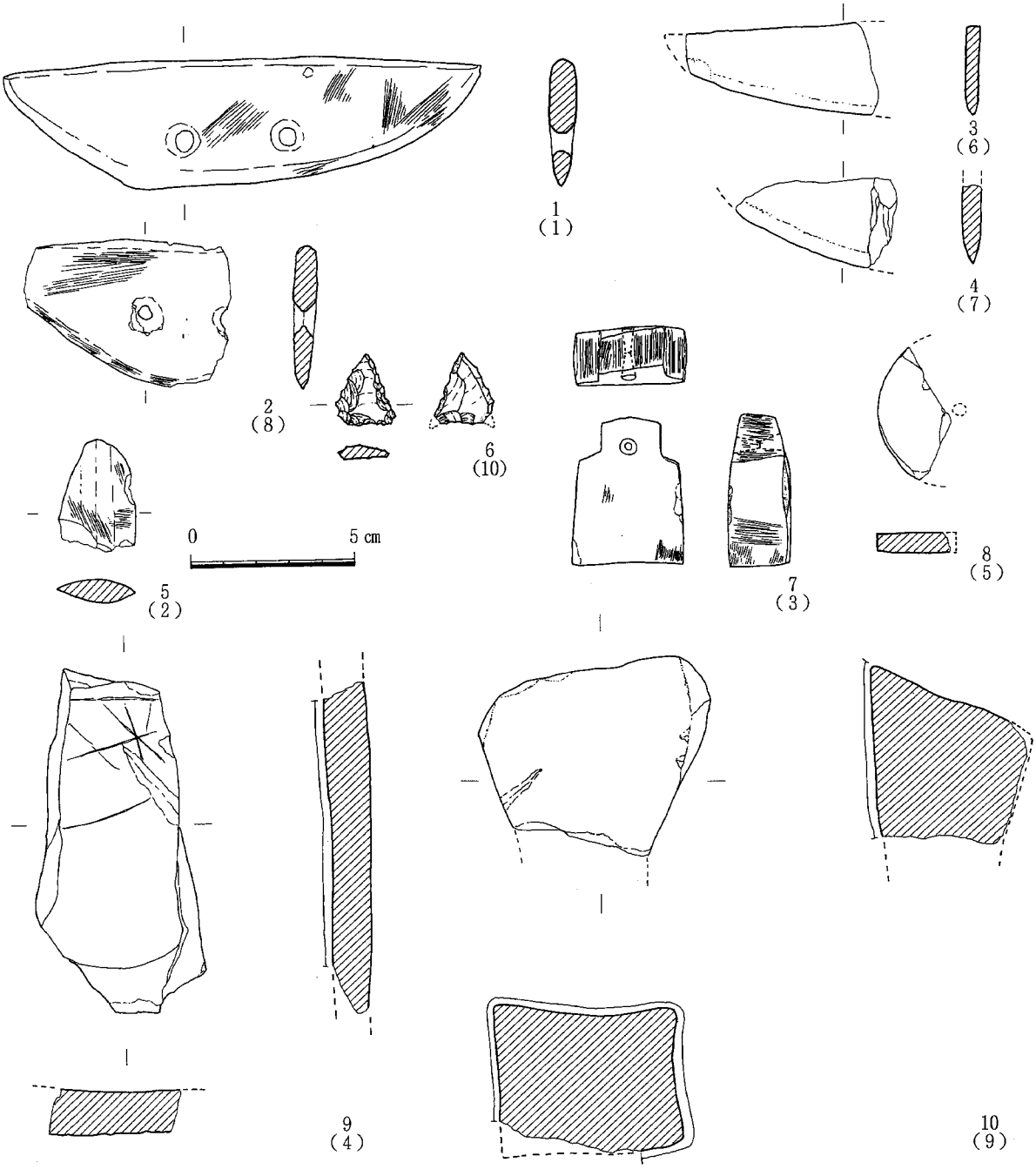


Fig. 16　出土石器実測図（1 : 2）

5も坏身である。口縁部は外反する。底部1／3ほどに回転ヘラケズリを施す。内底部には不定方向のナデを施す。復元口径10.6cm、受部径12.2cm、器高3.6cmを測る。6は須恵器の短頸壷である。完存品である。頸部は短く外反する。端部はわずかに凹面をなす。胴部は肩が張り、底部は丸底である。胴部上位2／3ほどにカキメを施す。底部には回転ヘラケズリを施す。口径10.5cm、胴部最大径18.5cm、器高14.5cmを測る。7は須恵器甕の口縁部である。端部は玉縁状を呈する。頸部は直線的に広がる。調整は内外面とも回転ナデを施す。8は須恵器平瓶である。頸部はほぼ直立に近い。胴部は肩が強く張り、最大径部のわずかに下位に沈線を巡らすが、部分的に不明瞭になる。沈線より上には回転ナデ、沈線より下位には回転ヘラケズリを施し、雑なナデをかける。底部はヘラ切りの後雑な不定方

向のナデを施す。口径6.5cm、胴部最大径15cm、器高15.5cmを測る。９は土師器甕である。口縁部は短く外反する。端部は坦面をなす。胴部は砲弾形をなし、丸底である。胴部全面に擬格子叩きを施す。内面には平行線文の当て具痕が見られる。口径11.4cm、器高18cmを測る。

溝17、19(Fig.15)　撹乱を境に別の遺構番号を付したが、一連の溝である。ほぼ東西方向を向く。幅70cm、調査区内での延長７ｍを測るが、東西共に更に延びるものと考えられる。深さは20cmほどしか残っていない。古墳時代後期に属する。

出土遺物　１は溝17出土の土師器把手である。上方に大きく屈曲する。上面には凹みを持つ。55、56は溝19出土遺物である。２は須恵器坏身である。かえり部は外反しつつ立ち上がる。底部のケズリは極めて雑で、ヘラ切りのまま未調整であるのかもしれない。器形の歪みが大きいがほぼ口径11cmに復元されよう。３は須恵器摺鉢である。底部のみの破片である。厚い円盤上の底部に、胴部を貼付る。底部内外は不定方向のナデ、胴部は回転ナデを施す。底径9.5cmを測る。

（４）出土石器

出土石器をまとめて述べる。大きくわけて弥生時代に属する石器と、古墳時代に属する石製品がある。

１～６は弥生時代に属する石器である。１は完形の石包丁で、ピット205出土である。小豆色を呈する立岩産の銅輝石安山岩製である。孔はかなり刃部側に寄っている。孔間の距離は2.2cmを測る。長14.5cm、幅４cmを測る。２は井戸18から出土した石包丁の破片である。１に類似して、孔はやや刃部側に寄る。孔間の距離は2.5cmを測る。幅4.4cmほどであろう。３、４は住居跡４の中央土壙である土壙７から出土した石包丁の破片である。。３はかなり細身のものと思われる。６は住居跡４から出土した黒耀石製の石鏃である。自然面を残す剥片を素材とし、側縁はほとんど片面からのみの調整によって整形する粗雑な作りの石鏃である。５は古墳時代井戸２の出土であるが、弥生時代の石剣の鋒部片と思われる。断面杏仁形を呈し、鋒も鋭さに欠ける。

７～10は古墳時代に属する石製品である。７、９は井戸３からの出土である。７はつまみと穿孔を持つ石製品である。将棋駒形の五角形の上半部につまみを作り出す。つまみの基部付近に両面から穿孔を施している。横断面は長方形である。各面に擦痕が見られる。提砥と考えられる。或いは形態的に権に類似したところもあるが、井戸の出土土器が示す６世紀末から７世紀前半頃の類例が少なく、現状では断定しがたい。細かい欠損はあるが完存品で、器高4.5cm、下端の幅3.4cm、厚さ1.9cm、重さ43ｇを測る。９は上面に細かい擦痕が見られる石製品である。砥石と考えられる。砥面と考えられる部分しか残存していない。８は古墳時代溝５から出土した。石製の紡錘車である。滑石製で、復元径５cmを測る。10は井戸２出土の砥石である。上側面以外は砥面として使われている。

（５）小結

比恵遺跡55次調査地点では弥生時代中期、後期の遺構、古墳時代後期の遺構が検出された。いずれも生活遺跡に関る遺構と考えられる。弥生時代中期の住居は、北側100ｍの位置にある50次調査地点を中心とする集落の南側縁辺部近くに当たるものであろう。50次地点に比べると遺構の分布が散漫で、出土遺物も少ないことが指摘できよう。古墳時代前期には遺構、遺物とも見ることができない。55次調査地点に北接する36次調査地点では前期の古墳(方形周溝墓?)が検出されており、55次地点では関連する遺構が見られないことは、土地利用に規制があったことが窺われる。後期にはいると、再び生活空間として利用されているが、該期には調査地点から北側～西北側400ｍほどに「那津官家」との関連が取沙汰される倉庫群が検出されており、この施設との関連はどうであろうか。55次地点でも東西方向の溝などが検出されており、倉庫群と集落もなんらかの総体的な企画で計画されている可能性も、今後検討していく必要を感じる。

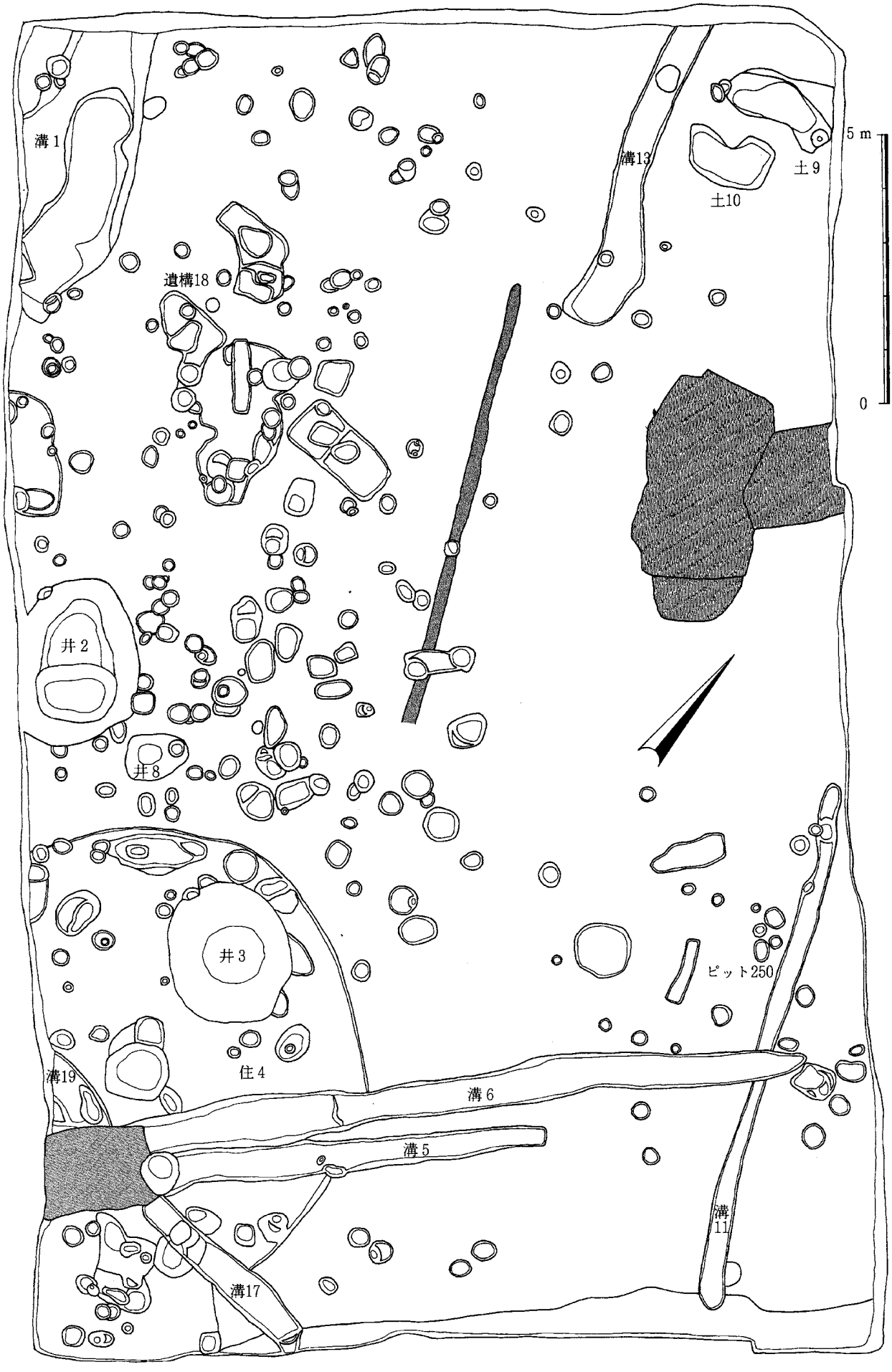
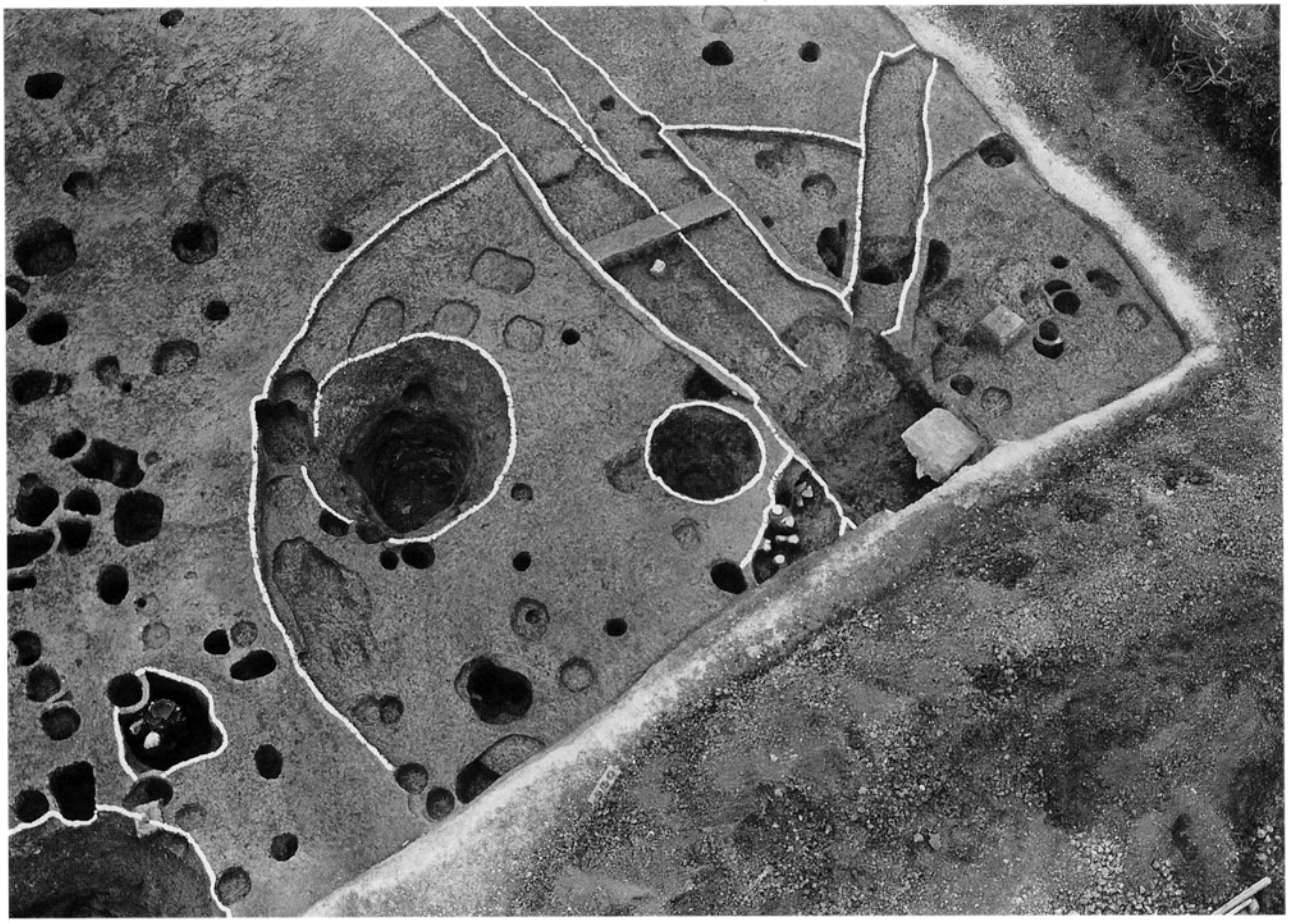


Fig. 17　遺構配置図（1：100）

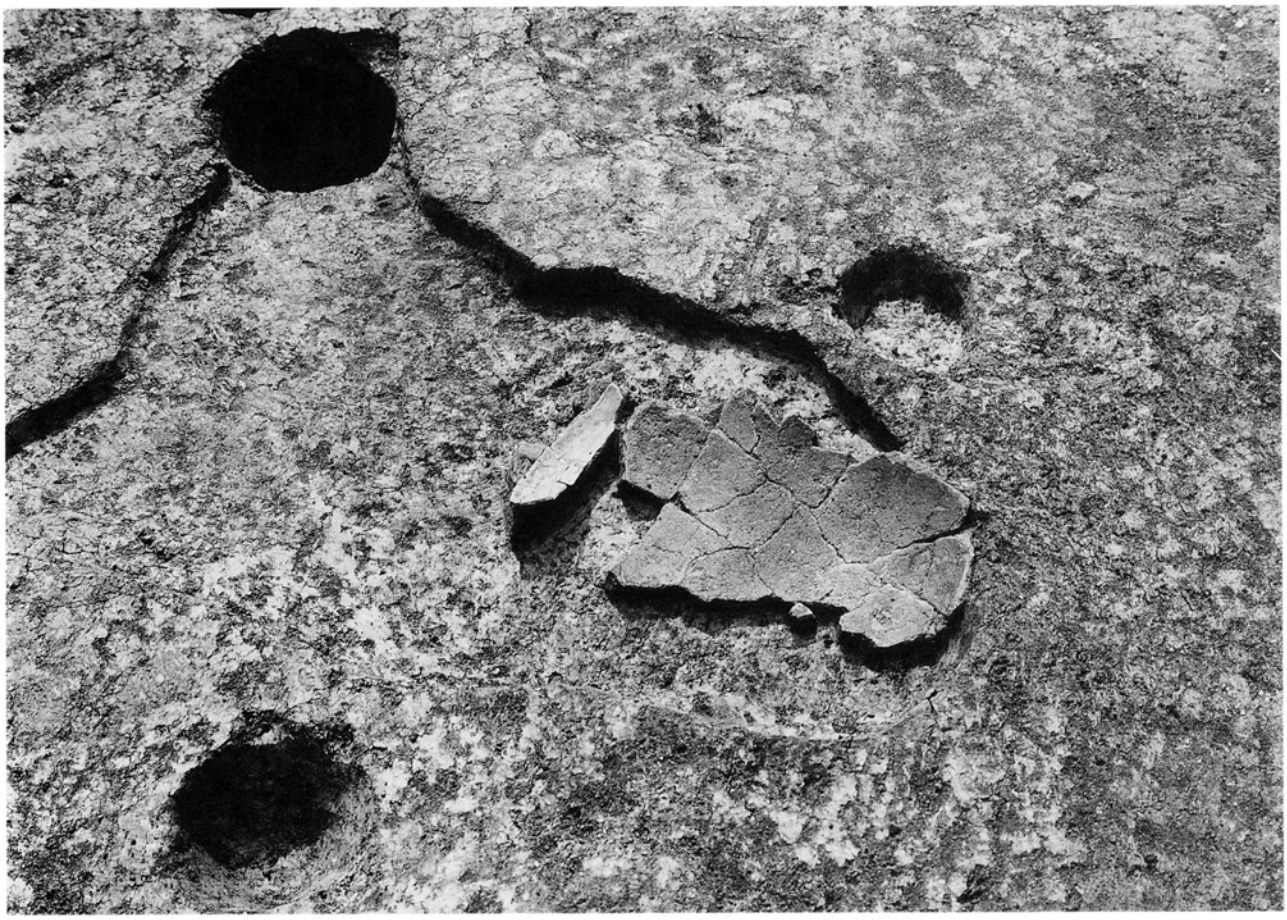
図　　版

(1)　調査区全景（西から）

(2)　溝１（東から）



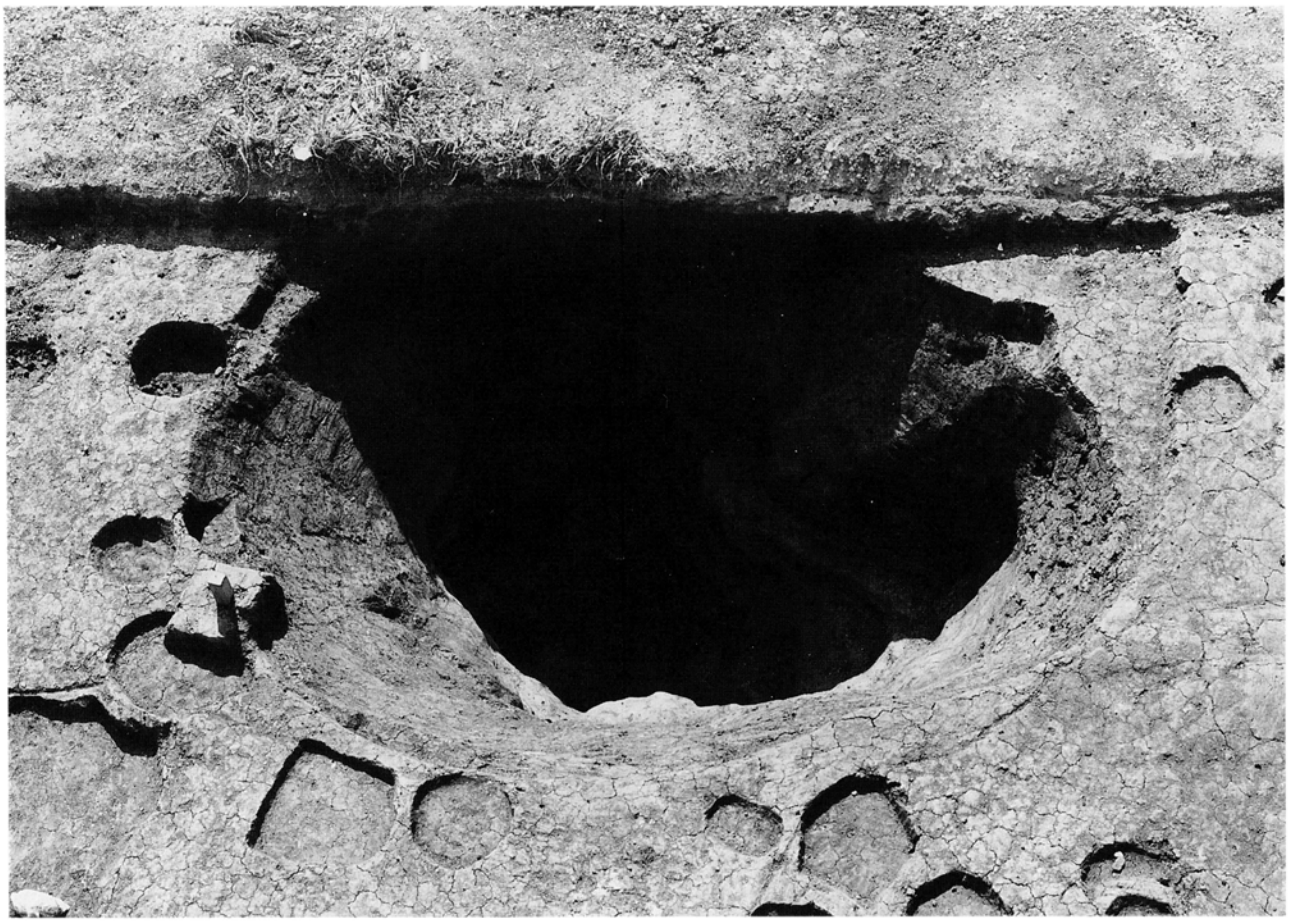
(1) 住居跡 4 （西から）



(2) 遺構 8 （北から）

(1)　井戸18上層　遺物出土状況（西から）

(2)　井戸18床面　遺物出土状況（西から）



(1) 井戸2（東から）

(2) 井戸3（西から）

(1)　溝19（西から）

(2)　ピット250（南から）

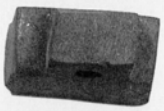
(49)

(50)

(51)

(48)

(18)



(21)

(3)

出土遺物（数字は登録番号）

比恵遺跡群（19）

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第442集

1996年3月31日

発　行　　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神1丁目8番1号

印　刷　　㈲松古堂印刷